

ドラクロワ作《墓地のハムレットとホレーシオ》

—フランスにおけるシェークスピア受容の観点から—

西嶋 亜美（京都大学大学院）

ウジェーヌ・ドラクロワ（1798-1863）は、1822年のサロン初出展以来、斬新な主題、色彩の対比と激しい筆遣いにより、ロマン主義の旗手として話題を集めた。その後1830年代に、大画面の歴史画や政府注文の装飾画と並行して制作されたのが、シェークスピア戯曲に主題を得た版画や小型の油彩画である。

中でも『ハムレット』五幕一場の「墓地のハムレットとホレーシオ」の場面は、油彩が三点、リトグラフは連作と単独との二点が制作され、構図も多様である。特に1835年制作のシュテッデル美術館蔵の油彩作品では、頭蓋骨を手に物思うハムレットがホレーシオと茫漠とした風景の中に描かれるのに対し、1838年のルーヴル美術館蔵の油彩画では、前景で二人の墓掘りが頭蓋骨を差出す役割を担い、ハムレットらとの間に緊張した関係が形成される。この二作品について、先行研究では、1825年の画家のロンドン滞在と1827年のイギリスのドルリー・レーン劇場等によるパリ公演の影響が自明とされる一方、変化に富む表現から画家の創意工夫をくみ取る作業は十分とは言い難い。本発表では、同場面に関連する先行作例との比較やフランスにおけるシェークスピア受容の検討を通じ、この二点の油彩作品を再考する。

まず、H. ハンマーシュミット＝フメル（2003）らの成果に与かりつつ、主に英国での挿絵や版画、俳優の肖像、そしてシェークスピア・ギャラリーに関連する物語画等の作例を検討すると、五幕一場が描かれる例は比較的新しいことがわかる。その中で、トマス・ロレンス卿作《ハムレットとしてのケンブル》（1801）からの本発表で扱う二作品への影響を指摘する。

また、この二作品における表現の相違を読み解くため、画家が参照可能であった様々な『ハムレット』を検証する。ロンドンの劇団による1827年のパリ公演は当地の知識人と芸術家に大反響をもたらした。だが現存する公演脚本の精査から唯一の着想源とは程遠いことがわかる。一方、ル・トゥールヌールの散文訳（1782年完成）は全挿話を当時最も忠実に仏訳し、1820年代にも版を重ねていた。さらに、フランス古典劇の規範に適うデュシスの翻案（1792年完成）は、1830年代になおコメディーフランセーズで上演されている。諸々の版の比較より、当時のフランスでは珍しいシェークスピア主題の絵画を初めてサロンに提出しようとした1835年の作品で、ドラクロワは、デュシスの古典劇風の翻案に則って、副次的モチーフを排し人物の内面の描写を重視したと考えられる。一方、1839年のルーヴル作品では、原作に忠実な翻訳とイギリスの劇団の公演の観劇等で構築したシェークスピア理解から、貴賤が混濁した新しい『ハムレット』像を、鑑賞者の想像力にうったえる深みのある表現で提示したことを明らかにしたい。

この二作品の差異から、文学や演劇を愛好した画家がそれらを絵画表現に昇華させる際の複雑な戦略と、フランスでの絵画・文学・演劇の有機的な関係を読み取ることができるのである。